

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

桂政因良基著

ノリシト同名

伊地知氏書冊

伊地知氏

あひはうと回地の龍女が拂く蛙樂とおひ
うさぎ波孔種を学もされも折ふきては
まことにまくとてかうむる水の面へあがあ部の鼓吹
もやううへまくわうぢや。れの婆苦隠きいそうの
あらもんぶちをわう鶴をさばひはの山から、世
のむくねの音聞りき水の心も(ちう)よどあき水草
屋もよううもとねのもひと情うもと花うもとあああ
やうお打にき時ううきは老の草れも數ひ油化
水さもまもんの如くに詠え出でるれの心ゆき
人う誰もんとゆうと詠へばいはうへと云ひ

行醫食ううううちの氣のば山水ゆうくてまもとまう
仕うらもて只一回見ゆうどくも見てるふちまは
ヨリあれと何うか想ひまえと見てれぬば数年ハ
八十も歳ねんと見て博よひが、長めよぞうく
だらまうれむとくふ勝の男をくいどくよふ博け
そくふもまようりえ水上ようりてばれまきよ
水の流を水よばらうりいのと水のゆうき
まとのにたちらすてほん苦仲尼とひ聖人の水
ちもがやでわらうきにも草木理りうきて立病とまく
あれりま方のせはすとよじまひまへはまくも
退く身のあられの争を成物もうちされ、丘陵
山とまちももみてしよぬあく／＼百川へ進ひ先
をあくまれとやく海へうけうけうけうけうけ
くすりと耳まにらけりうけ童か出でそくうい
ちくくとくさくうくと聞へば春のまくの
奥常陰もく行候もく差きより山かよんでもまくと
御ふくらひとくとく八十も歳ねんばみ代をまくと
ねの時もあひてぬのうけうがくうけもくと
おじ食をらくとえ東海の二きじ常草と成り

尼居ら先仙もくとと取て難ひのれも今まう
むちうれぬと達はんとおぬ因屋へよみひもん
様多あれと乗れやう。ほうにやうくがくを御し
うはば童と云やう东のあめちう思ひ立ちきちう志
のとまうく候てむきを何のうちへとすらむと
候はばうけうえのとくあめくみづくら苦の御ゆ
ほさんとソヘアリ作事一筋ハ老の幸。候とも本故
ゆどろむとまうに御きくらぬうちよまくに披写
候もとゆかだいくらくくらくらくらくらくらく
がえのとくうてううかれて御きくらぬも無。

今まくと尼しうれす。京ふやう仕事もとぬうち
さまなれも別の事へ仕事と只ひつ候のとまうく
侍る。とま日記うとはおうつる。筋とまくとくら
時の人見事。くうわくにあつて侍る人の命は
百年三万六千疊日とる。あつてはたまきひげは五十卒
ぬをじまくちく侍る。翁の妻が尼ふ今ハ定三十
も跡をひねん。ゆゑを見とまく。の事とうのまく
かまうゆじとハゆあに侍り翁。年よみふくも
今ま城主の内よ。よも侍し後まね院のまつね

身うちばさみの身へいきく高き竹のぬすりうちある
うきよと初モト出まききもゆも只すの事とほ居
ほきてあらもやえんとしよい、不思議なれで京
へはさて何身中上りきひめんとソミ今ハ立年安
ま成ぬるや萬ふのまわる後ちね院の御時うづ
尺傍らしおりばりもじうどり名能化を侍じと被文
美元二年のはつとよ後ちね院三重坊門殿とそき
えうき作と毛あくと詩奇漫愛絵の拂枕ふと侍
後院の拂時乞は泉殿と拂連奇年毎庚申
の日必侍じちう年内侍か將内侍とソ、也房連奇
拂まとの中うち紅の袴衣のまはをう出てうきうち
くともとぬとぬ句ともと出まれ侍じはぐく感す侍
言すよ吟詠せられき又拂腰取の尼とセハよち
世般仰り侍まされ、京極入道中納言殿うと用時の
令をばりしやんばは室を中の連奇拂をもの侍る奴
せ念の事うちうるを袖うちぬじてうじ何事うちも
身うちつ事あとはねうく、あうてゆひだりあく
全歌連奇、通多写ひひいたとこそ常陸の
猿波のうちのものひう、恩奉永をもれりあるうちの
郡のもの甲斐小瀬折の宮うて連奇ありう

まく仕あとこもじばくゆうちうくね
歌連音のゆきひんば通の事もくつゆ
あひてんふくをめきりづらうとくままで
非器のすとて仕事へかとそらもしてお仕じゆも
あうじつも通くのねれよるまたてきもあ
仕事連音の事きはまじめあうじまう
京極の中納言殿民アハ入通音とみおとめゆ
時まくらがむしきはをうくらうのゆまえ
下の人々又明近せよ教志を仕し事も
主なねう令のうちも申うれひをのはまゆふ裏
仕事へあら到事ももゆきにPあきをよ、よ付く
まう連音の事か堵く問音仕事しむるやま
日もくきくじうち入ねの音もうちもうちりは充
しきうちも懷中のうにまく仕事仕事うちりひきく
人を活況してまとねどもれ申は點とゆを
たまふゆうじうちり

一聞連音ハげ芦原圓もうりをてのまわす仕事又歌の
あも仕事ある
翁長云いと申ててき活況も仕事連音ハ天竺

そハ偈とすちう語の經は偈耶と云ひて則連音
がふそそハ連句とすちう歌ふそハ歌と云ふ歌
連音とすらもじうかへばすうそとすらし
一間も連音ハソシのせうちうまよやつもめきみ
おまがよあら

答う古今假名序は背之のうる天の御様の夷音
とソヌモモキチう先ねうの聲シテ
ゆあきくタマをねうすタマとあひうひぬ
とづふめうはもてのたまタマ
あおきくタマをねうすタマやとおよびぬとけりうち

哥ふニトシシカニキトハヤうう二ぢうらハ神の
聲う照つゝうまはう三十一字もゆきこしきく
仕うハううじう連音と云ふ名得て仕う也明近
にちも名す仕上はまよといふれもとを仕上し又
連音と云ふをもハ生よ仕うやう景行天皇アマテラス代
日奉武尊アマテラスの東の東もはまよ向ひうてはぬうおのう
仕上り波波山ハマハマ甲斐小酒折官ヨシヒロ波

多ひ一時暴武尊拂句ハマハマ

瑪比磨利莧玖波塙須擬底異玖用加
御莧流

まくはり人のあらしよ火とともまいまやうちきわ

そのほけくち

伽感奈陪底用珥波虚々能用比珥波荒

瑪伽瑪

まうむきのまかめひまうとちん
や後万葉集に入れる家持への

さ川の水鳴きよくうて因と

とくま尼

まうまき縞ハモトウムヘト付竹マササギ
も常にゆくすすり拾遺金葉うそと勅撰うらぎ
され只一句つ云極苦モナミ五十勺而匁キシム
半もううきあうるゝ後高僧院達保の法よりあらう
又名くの賊わの獨連歌を定家家降のうとれり傳
うりあ韵うそとけらる又名のまわうそとれて
せびにしき沙倉もけらうちりう連高とも柿本の官
名すれまうまと、案のむら官とて別居はきてても
せびに有名のうそとくき連高とねるとかあく
せびにもつねるせび、高僧院順徳院もくじ御製高
砂はは頃ちくとありをば、そむち後高僧院の佛代
あり又無行もく民ノ入通殿お大納言殿もくちく

も立すとあらう。承け竹大さ、京極中納言殿も老後も日毎よきをうそせられ竹へ拂腰ぬの尼とやくの上手にて常に張行もとを被日記もたまたまにとくをうめたり誰も宣く拂候傳んま後嵯峨の拂時福光園園白殿園明寺榜政殿唐申の拂連歌もだいきうちそりしきどきも名譽の上よりて竹ちゆうとくやゆ扇ひ内侍下將内侍上下の内侍ひだり拂えり。九条内大臣墓衣笠内府家良知家行家はちとよの時きれども今てはるん拂下を奉好士拂うしもく。高遠の人くはすまくし
は取分くぬる牛車も竹も道生寂恩無すをうじし有る。足利門院法勝寺もむのをとてとうれしもの多く集きて高妙速う竹にまづのちにあくよ多か。時ちば下の好士も多くうち竹に近づく爲世為相為縁ひちとぞひの式用ひにふれもくて賞歎せられ。争は争下よちうに争うむへ定く御説も及むをりひめし又駕籠の軒ひとすても院の御車ちとうちきり申竹つき又後光明照院殿ハ年よりて御車にそらむく拂候る。うとうとふ間東も代この対領ありふす。すれし事ちよへよ及び侍も近くに等持院

殿破小拂故あゆを勅讐れ難羨をうやくしるを爲めと
ソレしもの事うき上りて門すとも今はばらうが純
きを修ふらう但連音もやうに師説をうやうやれども之
て時よりて風のうばうせもうぬものうちりゆき付
うち救済も苦労りきよと承つてもや難いもととづぬ
ものとくわら青き葉藍うち出で藍うちもまた水へ
かう生水ありとくとくのまのせもいふ
入り出でるるつきの後せうちとアキの付ふる凡連音
いびうちの聲多本りそなきうち勅讐れどもそれ
やくの聲のうきれきふほの人の今か作つき
や古のき音へあら對うと思一あらじゆぢやう
もううへ申はる又一句の故せまう句ひ音へやふといつけ
きもとばとうと心ふうと詞もやうえぬ事ともがくとも
ばはのうよ辭まで詞もきてあたの魚不假事
ちう中の翁す。やはらうまく古懷多うて足
竹ふと老の念も物のひねるを仰げりた。歌のう
心ちき民の耳小さくてこそほの風もうしてはれ
毛詩と少く小きものとぞとぞとしも詞のを事
よれにうき文よ嘵嘵もくされハ詠うもとづるも
にきくの而ふを下すや奇と道の叔弔傳

もももん連寄いやうりちのをよせやうれやうれ
はあ君の感ひ傳ひんと無ひよき上手として
うもくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもく
ゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆう
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
あと月やほぬゑむじうとくとくとくとくとく
きうきうきうきうきうきうきうきうきうきう
むくむくに高のたまもき地根の梅よ雪よみ
もくしら京き風情のひぢらとくとくとくとく
走る走る走る走る走る走る走る走る走る
走る走る走る走る走る走る走る走る走る走る
先走るの腰よ今のもくもくもくもくもくもく
詩詩ソノ歌ソノ歌ハモト心もくぬえう吟の面向く
心もくぬひやく小貴竹るこ詩寄れ道へきく心をしきて
言葉のをかさをかのうちにもくみくもくもくもく
一間も連寄、國の政れにまちもちもちもちも
ゆく、ゆく、ゆく、ゆく、ゆく、ゆく、ゆく、ゆく
ゆく、ゆく、ゆく、ゆく、ゆく、ゆく、ゆく、ゆく

答云めも中ひまーき立馬れ太く音とどく、
政の忍きをもまきくいや中の音と音をねふをそ
あと化てたゞく又ふ志付くも王清候も是加湯浴て
ふの政とちとされし唐の音は毛詩とよえもま

ひ焉ともちうきてあそばへ人の罪ちくて政ハうまとす事
ちもあふも日本ノ焉ハまよ童達とてねどくえ
竹の万葉ありて只月もよ射^キる焉ハねり^シ詠
竹られ古今の序もよまよめりてものむれり
さふとよへまきらり又まくちるあるひとくわき色
野の中すらちとちをもえみのやうくもれりん
ソラ今ちあいきくあかうて向の月をうだる
そく風情の盡のちもるよ其のせりて世理^{ハシ}にし
竹ギキやいふ而あきわうても運脚^{ハシ}も道理^ハ
宵^{ハシ}をやういふくわうちり一字のてふといふも争は
ひままで立理^{ハシ}はく葉をもとをき焉^{ハシ}の上まとすう
をのつゝ心のよきをみて僻事^{ハシ}の匂たまそま
ぬきへゆ行^{ハシ}けり^{ハシ}七^{ハシ}もま^{ハシ}換^{ハシ}けられ
仙^{ハシ}也藤^{ハシ}也通理^{ハシ}トソニ字^{ハシ}テ竹^{ハシ}慈^{ハシ}鎮^{ハシ}和^{ハシ}也
くもをゆゆ^{ハシ}心^{ハシ}く^{ハシ}く^{ハシ}詞^{ハシ}もとをゆん^{ハシ}ハ
津^{ハシ}波^{ハシ}世^{ハシ}の^{ハシ}もうちひて風雅^{ハシ}の^{ハシ}焉^{ハシ}と^{ハシ}苦櫻^{ハシ}の
一同云連焉^{ハシ}ハ焉^{ハシ}中^{ハシ}テ^{ハシ}空^{ハシ}も^{ハシ}比^{ハシ}せ^{ハシ}つ^{ハシ}も^{ハシ}苦櫻^{ハシ}の
答^{ハシ}大^{ハシ}也^{ハシ}公理^{ハシ}至^{ハシ}の諸佛^{ハシ}も^{ハシ}焉^{ハシ}と^{ハシ}も^{ハシ}も^{ハシ}と^{ハシ}
事^{ハシ}も^{ハシ}神^{ハシ}佛^{ハシ}の^{ハシ}雪^{ハシ}だらも^{ハシ}奇^{ハシ}と^{ハシ}

多く群頬とまちひきをも今更に及まずともあ
まく心せん人をさうありてある。されど近づは
佛事禮仰多想も仰ぎて昼夜もてのむれし中定て
やうさんまくは浮も竹もんす。是れ等
もよ連音はあ念後念つまく又歎哀甚ず無れ
さうじとまくへ移りそぞやくあ達せのうむら
ちと見て時とゆくもるはまた又の秋となり
むとれくへお舞ようほ、あくとは能む能事の
觀念もあくとんや歌の道をじうと人のまうか
執心し乍らとく或を一首は余久難かひて思
祭ふきすらはくも待ちま連音はさやの事はけぬ事
うち只あがの連音は傍まきてうれとさのと拂着
拂ひちきやぢらう一曲もえよ餘念ちぢれハ禪念も
おのづこ聲よけりすすもぢりしのまうにへうか故や
強作らと爲りんのうちにかかとうのめよハ
定くとくもの難も多ぢん

一向云初かの時いわすに難事として連音がたの
いぢりゆきや 答え人情をめうるよりどうと古事記
門は孟子とふえよさればまのせふまのされよ
まろきゆしちれぬとひまくちらもとの荀子と

少文よハ生府の性ハやうきわすれも学さとて
ちるともどり楊子と少文よハ人の性ヒトヨリ善惡
オレモおそれもよきるにひづれヒトヨリちうらうきに
處くちうらPせうじ三のをくまよせよせに連
奇ヒされつゝあり天性即ち上手ももてて又生府の
ソノよもじもをそぐの上脛と下愚とはうはをそ
いふきれもよきはうれすて通う傳きハラキテ
ソノよもじもうち又善惡のキーラだる性を報告方に
よきよきよきよきよきよきよきよきよきよきよ
げせ一ちよぬるよしハ雲中抄も哥の道大聖文殊
の智恵ありとありたるあがも空あくちとよきれ
奇は十六七の法語されをちふる名手ともおわき
天のちうらPハうもくをもうくちうとよきれキハ、寂初の身
とちくかうりゆき連奇も墨量の人は初学どう面白
く秀逸をへら(まら)えられもうちちを誓古へくと
の体ハシロヒタリれ初らの人ねく、色青のつま
せばううりがまく初学ようきくとちとよももうき
やうううかかくおこりとよきよきよきよきよ
ともみみき、肉桂をもれりしづる(まゆ)と寝物うよ
先き而まくと葉して匂のまうり、ちの匂も

居るゝ間も心をもてまづゆきうちきなう
おうひつとうとよとソスの初めの時か御へは
じゆのうちよりおわくまきておふとおもや
お待ちけりとみゆきをすくらされどとおもや
そ書たあらんは只今波瀬の書下すとおもや
ゆきはくさうくさうみうきてこうちきま良哉
お成せられひづ波瀬の三位の入道殿人を鞠
おおひくはく聞かしよももいおともおもと
さくらきよがねは又何處かひびて鞠のよもも
やはいおともももくらうだうと作れさせひよの
氣は射してをつられはるはるはるはるは
せよけりまさかく、まうももうだらかくももうあら
奉りてうそを後の人よりむろあらはせひとおち
だらう奉りてうそしこ佛の言葉。氣は射して万の
法はまきゆるもまかくまくまくまくまく
かくん人はまくまくまくまくまくまくまく
よ、事をぬらうまとぬづきうち化ニよとれとおきて
とよ、ともあきゆに天上の神祇をやのうとせまつ
きりあはれてだん人のうづき上りよいかま
や只上りよちえうづき上りて心音を掌ひゆくして下す

とひてまろきる難事ハシ」ぬきはまくちうらま
せうり初かのれハシくわ葉半ハシちきせん
あゆみゆゑよゆハシふねハシさひゆハシはゆ
ちりハシあゆハシもわうすハシとへば
やかハシ伸通ハシもとひやゆハシゆうう
銀ハシうくはまハシもくらハシくち
ねハシくともハシくわゆハシくわゆハシくわゆハシ
まハシめハシい要ハシとゆハシくふくハシくわゆハシくわゆハシ
くふくハシくわゆハシくわゆハシくわゆハシくわゆハシ
くわゆハシくわゆハシくわゆハシくわゆハシくわゆハシ
名ハシきハシくわゆハシくわゆハシくわゆハシ

一問云ハシくはつまおぢハシやよ上ハシみを志ハシくわゆハシ
かハシく風ハシもかハシくゆハシくわゆハシくわゆハシ
の仰ハシとくゆハシくわゆハシくわゆハシくわゆハシ
をハシくも時の好士ハシようてハシくわゆハシくわゆハシ
せうちの一二の韵ハシをととはむねハシくわゆハシ
ゆきハシくわゆハシくわゆハシくわゆハシくわゆハシ
て而ハシくわゆハシくわゆハシくわゆハシくわゆハシ
なハシくわゆハシくわゆハシくわゆハシくわゆハシ

さくせん又只のまことのみ懷かれ而のれへたと
やうのまこととまことしてふともうきをもむちう事と
せぬせんこの感かうありとておきゆかうて三更懷
歌とは浦ふ邊無むかうにち居くもすく樂する序
破急の音とるむちも一の懷かうの序二六破音の懷
歌ひ急よてば。ちり薦もゆうに待ちとくやと通の
文をとどかへ連々而る居所をとづき洞又常に
うきよかううきよかうやうきよかうあら、ゆうもと
おとえをのせ侍うり

一聞か上みかき高はうめ。而向くはくわらん又連々

すとくは空くぬうやん。意いもうちより上みと
時ふううて一度のまちぬ時とゆふやうとぬ事も往々
大うきよかはんくうふぬゆふ心ゆくやうゆか堪き高
そ一束の内耳ふ立やう。は秀姿が二三事もお侍ん
とおき上みとちうしてももく（おれいそりのじ）に
ときゆへけくと百首の高ともせきゆかうて秀逸
とはかくよまき（きくとおのくもやけ）以上ふとい
おれおがくへけくとおも教せぬまきゆをせ
せうりいづふとまきゆをすとおもふまきゆを
せんかとへきと上みとさひふとおもとまきゆ

よかぬうて、ひも急着へりうせきすみやれ方
の通つとまゆわわへりまゆれもあをわの上
もとよく思きゆへゆくとまゆれもくちもとわの
トヨトヤへ古き聲もとよけん耶代も行き朝
ちきもわモ又保付てまゆぢむ德王代
もよきゆれもくちきしゆく只大さにつきて賈王も
忠王もモロ代へ今まよきゆれもくちもく
ゆくやちきるきりや連前も一通も限れぢきゆ
一間を發向へりやにまくきわゆる善き通のと極の
大車等うそくちもく發向もくわらけ

さりとば紙あ老るゆりとまがは郵ひもきうち
よき郵のとま因物をのれもうりきひくわらじ
毛のと極うて竹のゆるもくゆくを先
發のとくもくとゆくもくとゆくとくとくとくと
うりゆくとくとくとくとくとくとくとくとくと
毛のと極の限ゆびひきを上品となは
れくもくとくとくとくとくとくとくとくとくと
しと發のとま大やうにゆう為相の

かましも雪とも出よあの月と二重後先

明眼鏡闇向殿の

九重よあらわゆゆ起のゆもまゆゆひゆ

とあると考へましとは下りを今いあらわす程大す
写はせやる也但爲相ひ

霜きく日影よね。若葉ふとせれ同閑

白内理のセタヌ

雪むくはあやしくも天川すてせまざりに
みはりく望とうるも而ふくもくゆ作れいぢうる
後神もあたの面額うといだにほくと因歌うまく
やうよどりうつの仲うて行ふや界ふくせれともく
いづもむきねよどるくはは是も參れんやれ
かよくうりてとちやに志野れも参りてまもんを

やあきくあふきくやうう若くまであれ
參るの姿あれれのあらはそくはうう參れのうき
よととあうをきせり

一間の脇のへいあくにまくきゆやまき猶る、れど
うけくもくうちれをこのみんある中へうき。これ
ももまもむらまうに平懷ちんじうくや只もくく向
きくへ心ひんきゆくとすく(きこつ)うくやまやう
脇の脇のへいあくきゆくとすく(きこつ)うくやまやう
のうにぬうとく長すのゆうけくせつまのうゆゆ
よもくはやれを右方のゆうけてあるはやて

もも身も筋もさやうやせんば 痛むのれちる
きもやうちゅうひうそくはくと別の身とのねやすに
もくきよやうくさんすや作 膜のよ多ひいきくまよ
ゆうちれをやねよがくほもくと、みりれも身又通の
大車うそけらへまわれの人御めほし筋もく
下のよハ歌うば(せ)る

一聞連奇よハ急う傷負^{アシタガフ}うのと兼々 急者うと寛
たるはゆ席^{シテ}の寝^{スル}あつ(け)ゆゆも、う(き)やうえ又
急とは初かより^{アラ}は^シ難衣^{ミツイ}きりもあふ^シ得^{タシ}かじ
着^{マサニ}物^{モノ}の入^メも、急をモ難^{タシ}しゆ事^{トシ}一^ヒ思^ムる

うと來^カ小^シ誓^{ハシ}たしゆく^シ急^シのよも止^ムも無^シ
よおひきのゆのゆのゆく^シされ^ハ止^ムも止^ムもも
きゆゆのゆゆや^シ傷負^{アシタガフ}うそくは^シもも急^シとのふ
きもと四^シもに^シある^シ急^シを^シ待^メもんのまも^シも連
乘^{ハシメ}きく^シわちり^シ初^シ學^ムのゆく^シは急^シのちゆんと^シ
も^シ、おもゆく^シきく^シ遙^シく^シをよ^シ候^{マシ}らを^シ、
ゆゆふ^シ人^シ候^{マシ}は^シ先^シ要^リく^シと^シう^シ連^シ奇^{アシタガフ}
のゆく^シ、^シ上^シみゆる^シ作^シ別^シのゆく^シ、^シも^シう^シ、^シき
秀^シ逸^シ急^シのちゆん^シは^シは^シう^シ、^シも^シま^シ急^シの

わ後よりひやく時も凡れどもはきあり 連句より 唐文世俗のすゝみ合ひにちりむきに急者す 位の人をもろく
誓文もくへかまふまへゆるはははははははははははは
の多合てひよとあひけらん唐の文とくとも毛詩と
うきあひおきりうても、ほほへ角す。多合もせばあせ
市う歎の名すとくもうま多合けらん方きあは多く
のよだるゆきそけりうさうさうせめのす。せんじ
誓文もくへ人の國す。あまそひはまうりゆくゆく
やなゆ。和讃連句はくまくまくまくまくまくまく
角す。でくすとく太く和讃連句はくまくまくまくまく
とくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
ゆくしゆくしゆくしゆくしゆくしゆくしゆくしゆく
急者のぞうはくもとくわろまははははははははは
りまがゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
ありそれとせきすくもくもくゆくゆくゆくゆく
かへねれと急も空もまちうりゆくゆくゆくゆく
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
一回の鞠を上へ人ねむまくまくまく連句の金言れ
まづよあて善惡もぬくまき。何人かつづまわとそ
うくまき。善かや争うとけり。あくまくまくまく

一回の鞠を上へ人ねむまくまくまく連句の金言れ
まづよあて善惡もぬくまき。何人かつづまわとそ
うくまき。善かや争うとけり。あくまくまくまく

七八人そぞきこゑりへんへ居の後見も食を
食き事へまことに人數多くあれどもすらうてまし
又人やうへまことに人數多くあれどもすらうてまし
やううきとも但馬國よりぬきへ人へおだれもゆき
よくきつてくづめよみけぬきてうきを食ふの多
もよもよとるや大に秀逸の出来ぬきは又二三の小
二三の小もて而もさく下品の出来ぬきをよもぎ
つまうきうちへよみてくよもぎとく食ふの
よきよきや一産のひづらぬきをいとも食ふ
のなきこ物思うてあるうきへあもよきと雖波三

位入通のまゝハ浪川の舟にのりてとつねや
まつこちうきて下アまくらうき奇もねぢくゆき
上あむお袖きくらきも中へ無きゆきと竹

一問云あくび松古の何り肝要れわうてぢまく和漢の
古事記はれも多合うてちづれをえいほのものか松古
一色づきや量あよしも一束のゆか足てもやすて用ふ
ゆるまへきや量あよしも一束のゆか足ともうる
もとくぬきもゆて連もせんのせんすあり
松古にまきやひはと万葉もやうて作りぬといふの

根原そぞりのよ／＼あらねま／＼きるやま下日記風土
記も岡の名所の新りあてもあるものうれしく誓
うんへと決意もきくと又源氏伊勢守後左近掌
代とて機集名所の多さうとされゆる常ふるより
ゆきのあくは見えずの集をて二万とも其効と云
致わるち／＼ゆきりかのゆ／＼ほき／＼きるや

一問うちの根原のゆれぬはねねね奥実
の風体いきもとうやとはさむとせきゆのあす
只ちのふ属のゆ／＼しよもねのやえひ／＼せん
あくまよふ是者ゆみちひきてや／＼機迷せます

争ひゆきまゐる肩と／＼に詩の夢／＼きるや
ゆきだらふる襟と／＼そゆすとゆすとゆすとゆす
ゆ／＼げ通もえきゆ／＼しきゆ／＼ゆきえがりゆきゆ
翠／＼のゆゆ出／＼やけんゆゆゆゆとれてゆ
夜とよとよま／＼のゆゆはゆゆとゆゆ
ゆゆちりゆゆ

一上古跡

翠記

小ねもうれじゆかとゆく／＼夜ゆゆゆゆ

少ねもうれじゆかとゆくの郡／＼もと山城山ちり頭沼云
やねもうれじゆくの郡／＼もと山城山ちり頭沼云

ゆまとゆくみちと
秉燭の人ゆくゆく

かちく夜よれ夜日ふも十日と
のちくといひをはとふかちく

家持つ

樟川のわせきとくとくとくとく
田水のまつめのまつめのまつめ
かのまきとみをむりうる

一中古艸

天曆御門

小夜えくしまは神代く咸なり
滋那の内侍はせそぞ

やえよづづきをくわすくん

頼母師

柳の、もももももももももももも

ス輔御臣

じえ津の梅多わらや／＼ぬん

田の中か翁ち翁ち翁

僧正真覺

田中中かまき入ぬ梅多にまちう事

宝塔入通開向

ば水のうとひともや

賀茂川ゆゑてもよし
鶴岡院印

川を川ゆゑてもよしともよし

信源

川を川ゆゑともよしとれどもよし

一近來跡

さとをすうかつまよみて

後二位家隆

がとくといまもむかし

さくおお大宮人のうりあらも

前中納言寛家

かくとねきうみぬかの下かし

谷の小川やわらぎてもよん

前大納言為家

山ゆきあとのうみは下きて

なうともよしのうてへ移うき

が将内侍

うへかくわてもよみのねかの

たまよまくわうつとうる

美納言為氏

名もすももてうらちる山さう
きれひやもむきよるく年

無内侍

やあらきまの衣身にうり
小森もくわくあはきタケ色小

後二位家隆

鹿のうももれりやあくらん

寛治元年八月十五夜仙洞御連焉

が将内侍

よしもさかわも藉あうい風

前大納言烏家

さくねちに深きよもぢちも熱の夜ふ

寛元四年三月法勝寺をのぞき

これつまといくわよ

寂恩法師

梅のすれぬふうりへゆきて

寶治元年二月是が門堂をの下そ

楳やよしみくらわふあれ

世生法師

かよきりく。ううひもれま

同三年二月昆房門崇をのぞてそ

もももきぬやかつさみゆま

道生法師

うちじひく柳う枝の永き日小
んちゆきりもももやちるん

岡本翁闇白

山うわく梅のうきわゆを吸く
元享三年四月龜山後百韵色高に

たう一雪井はもとを高しま

後宇多院御製

添福寺千石也翁に

むし雪のあくまくは消えて

善阿法師

うまきもくらへまよあらうく
かゆくゆりもまをれまに

前中納言高相
ちゆうりのぬふ到りやま様

正和四年六月百韵高相に

金りきのとくをよし

伏見院御製

花すの桜原より申しゆひて
人ぬよ似く音やうもん

帝中納言為相

筆すの筆をすらにちくわに
うももや奇れむちくわん

民やは為筆

筆す川きの流れ湖のうへ 虹
タ色のうもは空すまされぬ

帝大納言為世

やま郭うもくもむむちも
ゆきのりくもへいもくうみも

害阿佐師

筆すつよ夏地のうもはる葉うそ

墨す筆 風塵う 口付う 本音う

古事う 心付う 瞬う 射揚う

音多々う てふうのう 李賀う筆

誹謗

鬼拉カヒラ

狂う

初掌辨

一聞き音も式団はソヨモトありおまよ。年一也
音も中古までハニシロツル御前ハヒトヨモト有心
せひの匂ちよかて仰せれとおまよ。式団つうり
にゆきもち。御文和弘宗の由り本式新式をも
ソヨモト年竹り謙倉山もお箱は夜うやうの式団
も北柿と号して。それきり南時もうひき
我武多高世以降れ竹やあうきとも拂下す者
多く南時のう常よりてちき式を背く事や
翁りふみれ式団は牛伏もんとすらうやく、
是が用ひらむ。さよも情ゆきう一通かとうけ

作そもつねもいふしと更竹もえ

一聞き聽わき音はいふううちゆうて竹やん音も
じつハ二字三字の中署物の名もと後院の御時
御文聽わと拂拂もうき近侍を源氏多名もと
常よ用ひるやうしてまちき拂も者うりおき
竹也と今よりは及むて大て初の人の人の賦わと
たぬぬれいの成賦わとでもきゆうて竹とも限ゆ
拂あへを實悟もくきくすばらハ面見まもまく
いくうち竹もくよせ爲もゆくと竹先秀逸の

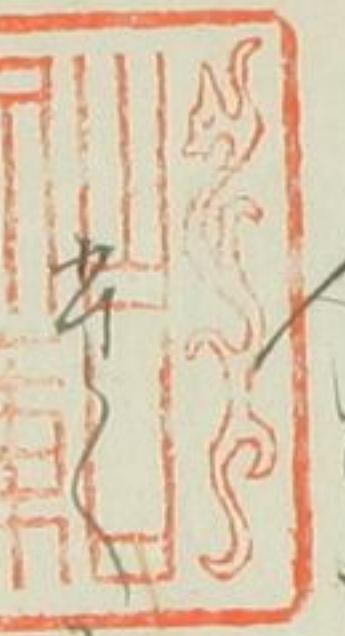
跡が至極整るゝて既にのれをばくらひ
一間も連音に百韵ありかへばれども聯句は
韵字をさへひと百韵とも曰せれ奇をきくれば
韵の文字をりれども曰くうしてある曰ふとソレ
のほへまよへるるを意をいふに竹林中望
八道駿も連音に百韵とも曰ふと百駿と
韵の文事りとさへにもアセキニ只百駿と
少くもとしと仰れしとハ脇と入韵と云ふ
侍えをも又只脚と云ふ也うちもとを序下
つあやうすうて竹を今更本筋にてても詮うま
申そぞせむつきたりひいれちゆき事とくめに
一間も連音に百韵は少く文字作法も放寔作るつま
少くもとしとちと作法の侍えとも禽處をきくま
支那字は人をもとよりて禽書のからみひと
つきてうの古用ひとひて禽書のほきと観
もとひの文字も天字も鳥字も用つて是れ
のうちひもとくちくうちくねりくかへ一書の用ひあれ
ひのうお肩のうひて跡とし文字書ひ奉る先後

賤わばあたの接觸までに商量して次第より
ゆ一匁の支度より御用ひてよもやあて後
詠吟をして極もうへ景々や角をい代有名字
やうりと能く分別をすゞえ肉理仙洞御柄あつて
の宮室殿は名御所お位を名づり六位の姓
名うちりと外のの専定れよもくと極きと
ちまする感へうしてよもくハ云實うしては云う
いをぬ人をゆききゆきうしてヤセとも先待く
文よき嗟嘆もよかにされ御奇もよ足され
よもくひ足のふじあらちもととつもよもくと面白
妙歎ほくちあり

翁もくちゆきもくひよの砌もくらむに
引く事もくらむにゆきくらむにゆきくらむに
のゆきくらむにゆきくらむにゆきくらむに
のゆきくらむにゆきくらむにゆきくらむに

ちぬかとあそばせうれまへる昔の秋も重り
ぬるの聲とあはう空きの面面へ是をやふた
うちの事にけりけりてもひはくはくはく
事のよしに被るもあらましこほの人にあれ
ときやうよみをすのうちもぢりぢりじりじ
うりうりあらむ名前をもひそきの代よやは
うきひのうちへきあをひそひそく食あへちよ
申へうきはきを食えう跡あも代へる名
将する人のみじめもねうき申すの代へ定め
降も因ひにまわらひる後多院ハ移家隣の
あさとあてあく萩野あるとれも定家に定
そもううへたるちゆくゆくはまくかみづら
時を以家隣より居をちかく定めへやされ
ゑがうはきもひよしよしよしよしをへきてこ
やくとも候あうと本うりあははははははは
さきのものもあけはんおれえ風人墨宿れうる
外へ余るも行うきゆく事のまゆもとを竹
人もまの候くはくはくはくはくはくはく
うわくはくはくはくはくはくはくはくはく

の序ももとどうしたの弟もひまつて　ゆき見ぢり
ともよしんをすし感しゆかて又きくもかまつて
かしきひをあちよやきし　さうりゆく　住吉もゆる
の冥あよみじゆは通の管領ともちうりば
ともやこのはまき人をねむしゆしゆもゆま
さんどり出竹　よふ名跡多きるか　て渡坡の
てや竹はもふもふもふもふもゆすもれをひ入



おわく竹

渡坡の竹

蘭白殿御作

良基ら

後光明照院道平ら男孫政大政大臣後一位氏長者
号後善光園院嘉慶二年六月十三日薨六十九

良基ら著述

新後拾遺集序　さきいの日記　雲升の清談　都城と破

愚閣貞註

同良基ら著述

雲升の花

白塵の記　さ夜の詠覺

小秋の詠覺

渡坡問答

蒐攷波集卷　鶴の墨

車中行草

柳の葉の花　暖拂むねむ　近來の詩

小秋の詠覺

まことよしゆりをかづひ人のいじゆにいちれうをまくと
眞くらゑひにひゆのやうに上もか唐もほれふれを物もハ
まくすの名よてや人のよせてもよこもくよとね言ハされ
とやほちぬだの時代よりよきむこうのよゆは機奉の心と
名すがられまろきゆきとくとへ栗のやうの心と名すれけりき柿の
本の長者としてとくとく歎きのちうとけり　はぢりとあ附とねいわ

百の手をも行つも定まつて早速れども口に仕事あつた
者にてひ寄せ要つたるハシタリとて駄のまきゆかのとせれり
も承し後嵯峨院の席作よハ朱内侍が侍内侍をもんじゆ房
主高柳よといともしき事も侍りき此は詔下のみ數より
ちゆくとて多處のゆゑも連寄り向かみ盡ひ考は只ものやうふ
ゆきらせせしめをばくはふゆきりきに考の毒とて一命
をそれば身のひくよへまできる事ふとて詩作の人の聯句
傳ふ事ハまことあふとて高柳との連寄とひこのくわん
初のわき松前公も侍ら「されば是も心も寧らばん」の連寄
小とれぬよりやへばつき云

此一再傳寫の筆ありふやあくゆゑの筆中
仕事も吳中か集もて校合もくふ侍うち
元やのすく写て奉り侍る事く正
ゆきゆき中かもし御ひ奉る

文化八九年 辛未孟春吉鳥

臣 林 靖龍 寫之

白木家收

